

十三夜

樋口一葉

青空文庫

上

いつも威勢いせいよき黒ぬり車くるまの、それ門かどに音おとが止とまつた娘むすめではないかと
 例れいは威勢いせいよき黒ぬり車くるまの、それ門かどに音おとが止とまつた娘むすめではないかと
 ふたおや親おやに出迎でむかはれつる物ものを、今宵こよひは辻つちより飛とびのりの車くるまさへ歸かへして
 兩親しよんぼりに出迎でむかはれつる物ものを、今宵こよひは辻つちより飛とびのりの車くるまさへ歸かへして
 悄しよんぼり然ぜんと格子戸かうしどの外そとに立たてば、家内うちには父親ちちはが相あひかはらずの
 高聲たかごゑ、いはゞ私わしも福人ふくじんの一人ひとり、いづれも柔順おとなしい子供こどもを持つ
 て育そだてるに手ては懸からず人ひとには褒ほめられる、分ぶん外ぐわいの欲よくさへ渴かわか
 ねば此上このうへに望のぞみもなし、やれく有あり難がたい事ことと物ものがたられる、
 あの相手あいては定さだめし母様はうさん、あゝ何なにも御存ごぞんじなしに彼あのやうに喜よろこん
 でお出遊いであそばす物ものを、何どの顔かほさげて離縁りゑん状じやうもらふて下くだされと言い

はれた物か、叱しかられるは必ひつちよう定たう、太郎たらうと言いふ子こもある身みにて
置いて驅かけ出だして來くるまでには種いろく々しあん思案しあんもし盡つくしての後のちなれど、
今いまさら更とにお老としより人おどろを驚おどろかして是これまでの喜よろこびを水みづの泡あわにさせます
る事ことつらや、寧いつそ話はなさずもどに戻もどらうか、戻もどれば太郎たらうの母はと言いはれて
何時いつくまでも原田はらだの奥おくさまさま、御兩親ごりようしんに奏任そうにんの賀むこがある身みと
自慢じまんさせ、私わたしさへ身みを節儉つめれば時ときたまは口くちに合あふ物ものお小遣こづかひも
差さしあげられるに、思おもふまゝとほを通して離縁りえんとならたらうは太郎たらうには繼母まは
の憂うき目めを見みせ、御兩親ごりようしんには今いままでの自慢じまんの鼻はなにはかひくに低ひくくさ
せまして、人ひとの思おもはく、弟おとの行末ゆくすゑ、あゝ此身このみ一つこゝろの心こゝろから出しゆつ
世せの眞しんも止とめずはもどならず、戻もどらうか、戻もどらうか、あおにの鬼おにのやう
な我良人わがつまのもともどに戻もどらうか、彼あの鬼おにの、鬼おにの良人つまのもともどへ、ゑゝ

厭いや厭いやと身みをふるはす途端とたん、よろ／＼として思おもはず格子かうしにがたりと音おとさすれば、誰だれだと大おほきく父親ちちおやの聲こゑ、道みちゆく惡あく太郎たらうの惡いたづら

戯たづらとまがへてなるべし。

そと

外そとなるはおほ／＼と笑わらふて、お父とつさ様わたし私ごで御座ざんすといかにも可愛かわゆ

き聲こゑ、や、誰たれだ、誰たれであつたと障しょう子じを引ひ明あけ、ほうお關せき

か、何なんだな其その様ような處ところに立たつて居ゐて、何どうして又また此このおそくに出でかけ

て來きた、車くるまもなし、女ぢよちゆう中ちゆうも連つれずか、やれ／＼ま早はやく中なかへ這はい

れ、さあ這はい入れ、何どうも不ふ意いに驚おどろかされたやうでまご／＼するわ

な、格子かうしは閉しめずとも宜よい私わしが閉しめる、兎とも角かくも奥おくが好いい、ず

つとお月つきごま様さまのさす方ほうへ、さ、蒲團ふとんへ乗のれ、蒲團ふとんへ、何どうも疊たゝみが

汚きたないので大屋おほやに言いつては置おいたが職しよくにん人にんの都合つがふがあると言いふ

てな、遠慮も何も入らない着物がたまらぬから夫れを敷ひて呉れ、やれ／＼何うして此遅くに出て来たお宅では皆お變りもなしかと例に替らずもてはやさるれば、針の席にのる様にて奥さま扱かひ情なくじつと涕を呑込で、はい誰れも時候の障りも御座りませぬ、私は申譯のない御無沙汰して居りましたが貴君もお母様も御機嫌よくいらつしやりますかと問へば、いや最う私は噫一つせぬ位、お袋は時たま例の血の道と言ふ奴を始めるがの、夫れも蒲團かぶつて半日も居れば／＼とする病だから子細はなしさと元氣よく何々と笑ふに、亥之さんが見えませぬが今晚は何處へか参りましたか、彼の子も替らず勉強で御座りますかと問へば、母親はほた／＼として茶を進めながら、亥之は

いま
 今しがた夜學に出て行きました、あれもお前お蔭さまで此間は
 しようきう
 昇給させて頂いたし、課長様が可愛がつて下さるので何
 くらゐころじようぶ
 れ位心丈夫であらう、是れと言ふも矢張原田さんの縁引が
 有るからだとして宅では毎日いひ暮して居ます、お前に如才は
 有るまいけれど此後とも原田さんの御機嫌の好いやうに、亥之は
 あとほ
 彼の通り口の重い質だし何れお目に懸つてもあつけない御挨拶
 でき
 よりほか出来まいと思はれるから、何分ともお前が中に立つて
 わたし
 私どもの心が通じるやう、亥之が行末をもお頼み申て置てお呉
 かは
 れ、ほんに替り目で陽氣が悪ければ太郎さんは何時も悪戯をし
 む
 て居ますか、何故に今夜は連れてお出でない、お祖父さんも戀し
 なげ
 がつてお出なされた物と言はれて、又今更にうら悲しく、連
 もの
 またいまさら
 かつ

れて來こやうと思おもひましたけれど彼あの子こは宵よひまで最もう疾とうに寐ねましたから其そのまゝ置おいて參まゐりました、本ほん當たうに惡いたづら戯ばかりつりまして聞きわけとは少すこしもなく、外そとへ出でれば跡あとを追おひまするし、家うち内に居ゐれば私わたしの傍そばばかり覗ねらふて、ほんに〜手が懸かつて成なりませぬ、何なぜ故あんなで御ご座ざりませうと言いひかけて思おもひ出しの涙なみだむねのなかみに漲みなぎるやうに、思おもひ切きつて置おいては來きたれど今いま頃ごろは目めを覺さまして母かさん母かさんと婢をんな女などもを迷めい惑わくがらせ、煎おせん餅せんやおこしの哆たらも利きかで、皆みな々く手てを引ひいて鬼おにに喰くはすと威おどかしてゞも居ゐやう、あゝ可愛かあひさうな事ことをと聲こゑたてゝも泣なきたきを、さしも兩ふた親おやの機き嫌げんよげなるに言いひ出いかねて、烟けむりにまぎらす烟たばこ草こ二三服ぶく、空から咳せきこん〜として涙なみだを襦じゆ袢ばんの袖そでにかくしぬ。

今宵は舊曆の十三夜、舊弊なれどお月見の眞似事に團子を
 こしらへてお月様にお備へ申せし、これはお前も好物なれば
 少々なりとも亥之助に持たせて上やうと思ふたれど、亥之助も
 何か極りを悪るがつて其様な物はお止なされと言ふし、十五夜に
 あげなんだから片月見に成つても悪るし、喰べさせたいと思ひ
 ながら思ふばかりで上る事が出来なんだに、今夜來て呉れるとは
 夢の様な、ほんに心が届いたのであらう、自宅で甘い物はいくら
 も喰べやうけれど親のこしらいたは又別物、奥様氣を取すて、
 今夜は昔しのお關になつて、見得を構はず豆なり栗なり氣に入つ
 たを喰べて見せてお呉れ、いつでも父様と噂すること、出世は
 出世に相違なく、人の見る目も立派なほど、お位の宜い方

々、ごみぶんや御身分のある奥様おくさまがたとの御交際おつきあひもして、兎も角とかくも原は

らだつま田の妻なかつと名告なづかて通とほるには氣骨きぼねの折をれる事こともあらう、女子をんなどもの使つか

ひやうひやう出でい入いりの者ものの行ゆき渡わたり、人ひとの上うへに立たつものは夫それだけだけに苦く勞らう

おほが多く、里方さとかたが此このやうやうな身柄みがらでは猶なほ更さらのこと人ひとに侮あなどられぬや

こころがうの心こころ懸かけもしなければ成なるまじ、夫それを種々さまざまに思おもふて見みると

と父とさんだとして私わたしだとして孫まごなり子こなりの顔かほの見みたいは當あたりりまへまへ

あんまど、餘あまりうるさく出でい入いりをしてはと控ひかへられて、ほんに御門ごもんの前まへ

とほを通とほる事ことはありとも木綿もめん着物きものに毛繻子けじゆすの洋傘かふもりさした時ときには見みす

かいすだれくお二階かいの簾すだれを見みながら、吁あお關せきは何なにをして居ゐる事ことかと思おもひや

ゆきするばかり行ゆき過すぎて仕舞しまひまする、實家じつかでも少すこし何なんとか成なつて居ゐるたな

まへらばお前まへの肩身かたみも廣ひろからうし、同おなじくでも少すこしは息いきのつけやう物もの

を、何を云ふにも此通り、お月見の團子をあげやうにも重箱
 からしてお恥かしいでは無からうか、ほんにお前まへの心遣こころづかひが
 思はれると嬉うれしき中なかにも思ふまゝの通路つうろが叶かなはねば、愚痴ぐちの
 つかみ賤いやしき身分みぶんを情なさけなげに言はれて、本當ほんたうに私わたしは親不孝おやふかうだ
 と思おもひまする、それは成程なるほど和らかひ衣類きものきて手車てぐるまに乗りある
 と時は立派りつぱらしくも見えませうけれど、父ととさんや母かさんに斯かうし
 て上あやうと思ふ事ことも出来できず、いはゞ自分じぶんの皮かは一重ひとゑ、寧いつそ賃仕ちんしご
 事ことしてもお傍そばで暮くらした方が餘あまつほど快こころよう御座ございますと言いひ出だ
 すに、馬鹿ばか、馬鹿ばか、其そのやうことを假かりにも言いふてはならぬ、嫁よめに行いつ
 た身みが實家さとの親おやの貢みつぎをするなど、思おもひも寄よらぬこと、家うちに居ゐる時とき
 は齋藤さいとうの娘むすめ、嫁入よめいつては原田はらだの奥方おくがたではないか、勇いさむさんの氣き

に入る様にして家の内を納めてさへ行けば何の子細は無い、骨が
 折れるからとて夫れ丈の運のある身ならば堪へられぬ事は無い筈
 をんななど、言ふ者は何うも愚痴で、お袋などが詰らぬ事を言ひ出す
 から困り切る、いや何うも團子を喰べさせる事が出来ぬとて一
 ちおほりつづく、日大立腹であつた、大分熱心で調製たものと見えるから
 十分に喰べて安心させて遣つて呉れ、餘程甘からうぞと父親の
 おどけ滑稽を入れるに、再び言ひそびれて御馳走の栗枝一豆ありがたく
 ちようだい頂戴をなしぬ。嫁入りてより七年の間、いまだに夜に入りて
 きやくき客に來しこともなく、土産もなしに一人歩行して來るなど悉皆
 ためしのなき事なるに、思ひなしか衣類も例ほど燦かならず、稀
 に逢ひたる嬉しさに左のみは心も付かざりしが、聳よりの言傳

とて何一言の口上もなく、無理に笑顔は作りながら底に萎れ
 ところあるは何か子細のなくては叶はず、父親は机の上の置時計
 計を眺めて、これやモウ程なく十時になるが關は泊つて行つて
 宜いのかの、歸るならば最も歸らねば成るまいぞと氣を引いて見
 る親の顔、娘は今更のやうに見上げて御父様私は御願ひがあ
 つて出たので御座ります、何うぞ御聞遊してと屹となつて疊に手
 を突く時、はじめて一トしづく幾層の憂きを洩しそめぬ。
 父は穩かならぬ色を動かして、改まつて何かのと膝を進めれば、
 私は今宵限り原田へ歸らぬ決心で出て參つたので御座ります、
 勇が許して參つたのではなく、彼の子を寐かして、太郎を寐かし
 つけて、最早あの顔を見ぬ決心で出て參りました、まだ私の手

より外誰れの守りでも承諾せぬほどの彼の子を、欺して寐かし
 て夢の中に、私は鬼に成つて出て参りました、御父様、御母
 様、察して下さりませ私は今日まで遂ひに原田の身に就いて御
 耳に入れました事もなく、勇と私との中を人に言ふた事は御座り
 ませぬけれど、千度も百度も考へ直して、二年も三年も泣盡
 して今日といふ今日どうでも離縁を貰ふて頂かうと決心の臍を
 かためました、何うぞ御願ひで御座ります離縁の状を取つて下さ
 れ、私はこれから内職なり何なりして亥之助が片腕にもな
 られるやう心がけますほどに、一人生一人置いて下さりませ
 とわつと聲たてるを嚙しめる襦袢の袖、墨繪の竹も紫竹の色に
 や出ると哀れなり。

夫それは何どういふ子し細さいでと父ちちも母ははも詰つめ寄よつて問とかゝるに今いままでは黙だま
 つて居ゐましたれど私わたしの家の夫めをと婦むかさし向むかひを半はん日にち見て下くださつたら
 大たい底ていが御お解わかりに成なりませう、物もの言いふは用よう事じのある時とき慳けん貪どんに申まをつ
 けられるばかり、朝あさ起おきまして機き嫌げんをきけば不ふ圖と脇わきを向むひて庭にはの
 草くさ花ばなを態わざとらしき褒ほめ詞ことば、是はらにも腹はらはたてども良おつと人あその遊あそばす事こと
 なればと我が慢まんして私わたしは何ことも言こと葉ばあらそひした事ことも御ご座ざんせぬけれ
 ど、朝あさ飯はんあがる時ときから小こ言ごは絶たえず、召めしつかひ使まへの前まへにて散さん
 々／＼と私わたしが身みの不ぶ器ぎ用よう不ぶ作さく法ほうを御お並ならへなされ、夫それはままだく辛しん
 棒ぼうもしませうけれど、一こと言め目めには教けう育いくのない身み、教けう育いくのな
 い身みと御お蔑さげみなさる、それは素もとより華くわ族ぞく女ぢよ學がく校かうの椅い子すにかゝ
 つて育そだつた物ものではないに相さう違ゐなく、御ご同どう僚りょうの奥おく様さまがたの様やうに

お花のお茶の、歌の畫のと習ひ立てた事もなければ其御話しの
 御相手は出来ませぬけれど、出来ずは人知れず習はせて下さつて
 も濟むべき筈、何も表向き實家の悪るいを風聽なされて、
 召使ひの婢女どもに顔の見られるやうな事なさらずとも宜かり
 さうなもの、嫁入つて丁度半年ばかりの間は關や關やと下へも
 置かぬやうにして下さつたけれど、あの子が出来てからと言ふ物
 は丸で御人が變りまして、思ひ出しても恐ろしう御座ります、私
 はくら暗の谷へ突落されたやうに暖かい日の影といふを見た事
 が御座りませぬ、はじめの中は何か串談に態とらしく邪慳
 に遊ばすのと思ふて居りましたけれど、全くは私に御飽きなされ
 たので此様もしたら出てゆくか、彼様もしたら離縁をと言ひ出す

かと苦^{いぢ}めて苦^{いぢ}めて苦^{いぢ}め抜^ぬくので御座^{ござ}りましよ、御父^{おとつさん}様も御母^{おつかさ}
 様も私の性^{せうぶん}分^{ぶん}は御存^{ごぞん}じ、よしや良人^{おつと}が藝^{げい}者^{しやぐる}狂^{きやう}ひなさらうと
 も、圍^{かこ}い者^{もの}して御置^{おお}きなさらうとも其^{そん}様^{じやう}な事^{こと}に悋^{りん}氣^きする私^{わたし}でもな
 く、侍婢^{をんな}どもから其^{そん}様^{じやう}な噂^{うわさ}も聞^きえまするけれど彼^あれほど働^{はたら}きのあ
 る御方^{おかた}なり、男^{をとこ}の身^みのそれ位^{くらゐ}はありうちと他^よ處^{そゆき}行^ゆには衣類^{めしもの}にも氣^き
 をつけて氣^きに逆^{さか}らはぬやう心^{こゝろ}がけて居^おりまするに、唯^{たゞ}もう私^{わたし}の爲^す
 る事^{こと}とては一^いから十^{じゆ}まで面^{おも}白^{しろ}くなく覺^{おぼ}しめし、箸^{はし}の上^あげ下^{おろ}しに
 家^{いへ}の内^{うち}の樂^{たの}しくないは妻^{つま}が仕方^{しかた}が惡^{わる}いからだと仰^{おつ}しやる、夫^それ
 も何^どういふ事^{こと}が惡^{わる}い、此^{こゝ}處^{ちよ}が面^{おも}白^{しろ}くないと言^いひ聞^きかして下^{くだ}さる
 様^{やう}ならば宜^よけれど、一^{すぢ}筋^{つま}に詰^{つま}らぬくだらぬ、解^{わか}らぬ奴^{やつ}、とても相^さ
 談^{うだん}の相^{あい}手^てにはならぬの、いはゞ太^{たらう}郎^{らう}の乳^う母^ぼとして置^おいて遣^{つか}はす

のと嘲あざけつて仰おつしやる斗ばかり、ほんに良人おつとといふではなく彼の御方あ おかたは鬼おに
 で御座ござりまする、御自分ごじぶんの口くちから出てゆけとは仰おつしやりませぬけ
 れど私わたしが此このやう様な意久地いくぢなしで太郎たらうの可愛かわゆさに氣きが引ひかれ、何どう
 でも御詞おことばに異背いはいせず唯はいく々と御小言おこごとを聞きいて居おりますれば、張はり
 も意氣いきぢ地ぢもない愚ぐうたらの奴やつ、それからして氣きに入いらぬと仰おつしや
 りまする、左さうかと言いつて少すこしなりとも私わたしの言い條ひでうを立て、負まけ
 ぬ氣きに御返事おへんじをしましたら夫それを取とつてに出でてゆけと言いはれるは必ひつぢ
 定やう、私わたしは御母様おつかさんで來くるのは何なんでも御座ござんせぬ、名なのみ立派りつぱ
 の原田勇はらだいさむに離縁りゑんされたからとて夢ゆめさら残のこりをしいとは思おもひませ
 ぬけれど、何なんにも知しらぬ彼の太郎たらうが、片親かたおやに成なるかと思おもひます
 ると意地いちぢもなく我慢がまんもなく、詫わびて機嫌きげんを取とつて、何なんでも無ない事ことに

恐れ入つて、今日までも物言はず辛棒して居りました、御父
 様、御母様、私は不運で御座りますとて口惜しさ悲しさ打出
 し、思ひも寄らぬ事を談れば兩親は顔を見合せて、さては其
 様の憂き中かと呆れて暫時いふ言もなし。
 母親は子に甘きならひ、聞く毎々に身にしみて口惜しく、
 父様は何と思し召すか知らぬが元來此方から貰ふて下されと
 願ふて遣つた子ではなし、身分が悪いの學校が何うしたのと宜
 くも宜くも勝手な事が言はれた物、先方は忘れたかも知らぬが此
 方はたしかに日まで覺えて居る、阿關が十七の御正月、まだ門
 松を取もせぬ七日の朝の事であつた、舊の猿樂町の彼の家の
 前で御隣の小娘と追羽根して、彼の娘の突いた白い羽根が

とほとほ通り掛かつた原田はらださんの車くるまの中なかへ落おちたとつて、夫それをば阿關おせきが貰もらひ
 に行ゆきしに、其その時ときはじめて見みたとか言いつて人橋ひとばしかけてやいノ
 〵と貰もらひたがる、御身おみぶん分ぶんがらにも釣合つりあひませぬし、此方こちうはまだ根
 つからの子こ供どもで何なにも稽古けいこ事ことも仕込しこんで置おきませず、支度したくとても
 唯ただ今いまの有あり様さまで御座ございますからとて幾度いくたび断ことつたか知しれはせぬ
 けれど、何なにも舅姑しちぢとめのやかましいが有あるでは無なし、我わしが欲ほしくて我
 が貰もらふに身み分ぶんも何なにも言いふ事ことは無い、稽古けいこは引取ひきとつてからでも充
 分ぶんさせられるから其その心しん配ばいも要いらぬ事こと、兎角とかくくれさへすれば大
 事いじにして置おかうからと夫それは夫それは火ひのつく様やうに催さい促そくして、此方こちうか
 ら強請ねだつた譯わけではなけれど支度したくまで先方さきで調とへて謂いはゞ御前おまへは戀こひ
 女房よぼう、私わたしや父様とくさんが遠慮ゑんりよして左さのみは出入でいりをせぬといふも勇いさむ

さんの身分みぶんを恐おそれてゝは無い、これが妾手めかへかけに出だしたのではな
 ししようたう正當しようとうにも正當しようとうにも百ひやくまんひやくなら頼たのみによこして貰もらつて行いつた
 嫁よめの親おや、大威張おほゑはりに出で這入はいりしても差さつかへは無なけれど、彼方あちらが立り
 派つぱにやつて居ゐるに、此方こちらが此この通とほりつつまらぬ活計くわしをして居ゐれば、
 御前おまへの縁ゑんにすまがつて聳むこの助たすけ力ちからを受けうけもするかと他人ひと様さまの處おもはく思はくが
 口惜くちをしく、瘦やせ我慢がまんでは無なけれど交際つきあひだけは御身ごみぶん分さう相おう應つに盡つく
 して、平常へいぜいは逢あいたむすめいたかほ娘みの顔みも見みずみに居ゐます、夫それをなんば何なんの
 馬鹿ばか々々／＼しい親おやなし子ごでも拾ひろつて行いつたやうに大層たいさうらしい、物もの
 が出來できるの出來できぬのと宜よく其様そのんな口くちが利きけた物もの、黙だまつて居ゐては際さ
 限いげんもなく募つつて夫それは夫それは癖くせに成なつて仕舞しまひます、第一だいは婢を
 女んなどもの手前てまへ奥おく様さまの威光ゐくわうが削そげて、末すゑには御前おまへの言いふ事ことを聞き

ものく者もなく、太郎を仕立てにも母様を馬鹿にする氣になられた
 ら何としまする、言ふだけの事は屹度言ふて、それが悪いと小
 言をいふたら何の私にも家が有ますとて出て來るが宜からうでは
 ないか、實に馬鹿々々しいとつては夫れほどの事を今日が日まで
 黙つて居るといふ事が有ります物か、餘り御前が温順し過るから
 我儘がつのられたのである、聞いた計でも腹が立つ、もうく退
 けて居るには及びません、身分が何であらうが父もある母もある、
 年はゆかねど亥之助といふ弟もあればその様な火の中にじつとし
 て居るには及びぬこと、なあ父様一遍勇さんに逢ふて十分油を取
 つたら宜う御座りましよと母は猛つて前後もかへり見ず。
 父親は先刻より腕ぐみして目を閉ぢて有けるが、あゝ御袋、

無茶むちやの事ことを言いふてはならぬ、我わしさへ始はじめて聞きいて何どうした物ものか
 と思し案あんにくれる、阿關おせきの事ことなれば並な大だい底ていで此こんん様やうな事ことを言いひ出だし
 さうにもなく、よく／＼愁つらさに出でて來きたと見みえるが、して今夜こんや
 は聳むこどのは不る在すか、何なにか改あらたまつての事じけんでもあつてか、いよ／
 \離縁りゑんするとも言いはれて來きたのかと落おちついて問とふに、良人おつとは一お
 昨日と、ひより家うちへとは歸かへられませぬ、五日か六日かと家うちを明あけるは平つね常ね
 の事こと、左さのみ珍めづらしいとは思おもひませぬけれど出で際きはに召物めしものの揃そろへ
 かが悪わるいとて如何いかほど詫わびても聞き入れがなく、其品それをば脱ぬいで
 擲たきつけて、御自身ごじ、ん洋服ようふくにめしかへて、吁あゝ、私わし位ぐらゐ不仕合ふしあはせ
 の人にん間げんはあるまい、御前おまへのやうな妻つまを持もつたのはと言いひ捨すてに
 出でて御出おいで遊あそびました、何なんといふ事ことで御座ござりませう一年ねん三百六十

五日物にものいふ事ことも無く、稀々たま々々言いはれるは此このやうやうなな情なさけないことば詞ことばをかけ
 られて、夫それでも原田はらだの妻つまと言いはれたいか、太郎たらうの母はで候さくらふと顔かほ
 し拭ぬぐつて居ゐる心こころか、我身わがみながら我身わがみの辛しん棒ぼうがわかりませぬ、も
 うくもう私わたしは良人つまも子こも御座ござんせぬ嫁よめ入いせぬ昔むかしと思おもへば夫それ
 まで、あの頑ぐわん是ぜない太郎たらうの寝顔ねがほを眺ながめながら置おいて來くるほどの
 心こころになりましたからは、最もう何どうでも勇いさむの傍そばに居ゐる事ことは出で來きませ
 ぬ、親おやはなくとも子こは育そだつと言いひまするし、私わたしのやうやうな不運ふうんの母はの
 手てで育そだつより繼母まはは御ごなり御手おてかけなり氣きに適かなふた人ひとに育そだて、貰もら
 ふたら、少すこしは父御ていごも可愛かわゆがつて後々のち々々あの子この爲ためにも成なりませう、
 私わたしはもう今宵こよひかぎり何どうしても歸かへる事ことは致いたしませぬとて、斷たつて
 も斷たてぬ子この可憐かわゆさに、奇麗きれいに言いへども詞ことばはふるへぬ。

父は歎息して、無理は無ない、居ゐる愁さむらくもあらう、困こつた中なかに成な
 つたものよと暫時阿關しばらくおせきの顔かほを眺ながめしが、大丸鬘おほまるまげに金輪きんわの根ねを卷ま
 きて黒縮緬くろちりめんの羽織はをりなん何をの惜をしげもなく、我わが娘むすめながらもいつしか
 とくのおくさまふう調とくふ奥様風おくさまふう、これををば結び髪がみに結ゆひかへさせて綿銘仙めんめいせんの半はん
 天んに襷たすきがけの水仕業みづしわざさする事こといかにして忍しのばるべき、太郎たろうと
 いふ子こもあるものなり、一端たんの怒いかりに百年ねんの運うんを取とりはづして、人ひと
 には笑わらはれものとなり、身みはいにしへの齋藤さいとう主計かずへが娘むすめに戻もとらば、
 泣なくとも笑わらふとも再ふたゝ度び原田はらだ太郎たろうが母はとは呼よばるゝ事こと成なるべきに
 もあらず、良人おつとに未練みれんは残のこさずとも我わが子この愛あいの斷たちがたくは離はな
 れていよく物ものをも思おもふべく、今いまの苦勞くろうを戀こひしがる心こころも出いづべし、
 斯かかたちよく生うまれたる身みの不ふ幸しやはせ、不ふ相さう應おうの縁ゑんにつながれて幾いく

らの苦勞くらうをさする事ことと哀れあはさの増れまさども、いや阿關おせきこう言いふと父ちち
 が無慈悲むじひで汲取くみとつて呉くれぬのと思おもふか知らぬが決けつして御前おまへを叱しか
 るではない、身み分ぶんが釣合つりあはねば思おもふ事ことも自然しぜん違ちがふて、此方こちらは眞しんか
 ら盡つくす氣きでも取とりやうに寄よつては面おも白しろくなく見みえる事こともあらう、
いさむ勇いさむさんだからとて彼あの通とほり物ものの道理だうりを心こゝろ得えた、利發りはつの人ひとではあ
 り隨ずい分ぶん學がく者しやでもある、無茶むちやくちや苦茶くちやにいぢめ立たてる譯わけではあるまい
 が、得えて世間せけんに褒ほめ物ものの敏腕はたらきて家いなど、言いはれるは極きわめて恐おそろし
わがい我わがまゝ物もの、外そとでは知しらぬ顔かほに切きつて廻まわせど勤つとめ向むきの不ふ平へいなど
 まで家内うちへ歸かへつて當あたりちらされる、的まとに成なつては隨ずい分ぶんつらい事こと
 もあらう、なれども彼あれほどの良人おつとを持もつ身みのつとめ、區役所くやくしよ
 がよひの腰辨當こしべんたうが釜かまの下したを焚たきつけて呉くれるのは格かくが違ちがふ、隨した

がつてやかましくもあらう六づかしくもあらう夫を機嫌それの好きげんいやう様
 にとゝのへて行くが妻の役、表面つまには見やくえねど世間うわべの奥み様おくさまとい
 ふ人達ひとたちの何れも面おもしろ白くをかしき中なかばかりは有あるまじ、身み一つ
 と思おもへば恨うらみも出でる、何なんの是これが世よの勤つとめなり、殊ことには是これほど
 身みがらの相違さうみもある事ことなれば人一倍ひとばいの苦くもある道理だうり、お袋ふくろなどが
 口くちひろ廣ことい事は言いへど亥い之のが昨さくこん今げつきうの月あり給ひつきやうに有あついたも必ひつきやう竟あ
 は原田はらださんの口くちい入れではなからうか、七なな光ひかりどころか十とひかり光も
 して間接よそながらの恩おんを着きぬとは言いはれぬに愁つらからうとも一つは
 親おやの爲ため弟との爲ため、太郎たらうといふ子こもあるものを今けふ日ふまでの辛しんぼう棒ぼうがな
 るほどならば、是これから後ごとて出で來きぬ事ことはあるまじ、離り縁ゑんを取とつ
 て出でたが宜よいか、太郎たらうは原田はらだのもの、其そち方は齋さいとう藤むすめの娘むすめ、一ひと度ど縁ゑん

が切きれては二度と顔見かほみにゆく事こともなるまじ、同じく不運ふうんに泣なくほ
 どならば原田はらだの妻つまで大泣おほなきに泣なけ、なあ關せきさうでは無ないか、合點がてん
 がいつたら何事なにごとも胸むねに納おさめて、知らぬ顔かほに今夜こんやは歸かへつて、今いまま
 で通どほりつゝつしんで世よを送おくつて呉くれ、お前まへが口くちに出ださんとても親おや
 も察さつする弟おとも察さつする、涙なみだは各自てんでに分わけて泣なかうぞと因いん果ぐわを含ふくめて
 これも目めを拭ぬぐふに、阿關おせきはわつと泣ないて夫それでは離縁りゑんをといふた
 も我わがまゝで御座ござりました、成程なるほど太郎たらうに別わかれて顔かほも見みられぬ様やうに
 ならば此世このよに居あたとして甲斐かひもないものを、唯目たゞめの前まへの苦くをのがれ
 たとして何どうなる物もので御座ござんせう、ほんに私わたしさへ死しんだ氣きにならば
 三方ぼう四方ほう波風はうなみたゝず、兎ともあれ彼あの子こも兩親れうしんの手てで育そだてられま
 するに、つまらぬ事ことを思おもひ寄よりまして、貴君あなたにまで嫌いやな事ことを御聞おき

かせ^{まをし}申ました、今宵^{こよひかぎ}限り關^{せき}はなくなつて魂^{たましゐ}一つが彼の^あ子の^こ身を^み
 守^{まも}るのと思^{おも}ひますれば良^{おつと}人のつらく當^{あた}る位^{くらゐ}百年^{ねん}も辛^{しん}棒^{ぼう}出來^{でき}さう
 な事^{こと}、よく御言^{おことば}葉^{がてん}も合點^{がてん}が行^ゆきました、もう此^{こん}様な^{こと}事は^{おき}御聞^{おき}かせ
 申^{まをし}ませぬほどに心^{しん}配^{ぱい}をして下^{くだ}さりますなとて拭^{ぬぐ}ふあとから又^{また}涙^{なみだ}
 母^は親^{おや}は聲^{こゑ}たて、何^{なん}といふ此^{この}娘^こは不^ふ仕^し合^あと又^{また}一^{ひと}しきり大^{おほ}泣^なきの雨^{あめ}、
 くもらぬ月^{つき}も折^{をり}から淋^{さび}しくて、うしろの土^ど手の^て自然^{しぜん}生^はを弟^{おと}の亥^い
 の^をつ折^をつて來^きて、瓶^{びん}にさしたる薄^{すく}の穂^ほの招^{まね}く手^て振りも哀^{あは}れなる夜^よな
 り。
 實^{じつ}家は^か上野^{うへ}の新^{しん}坂^{さか}下^{かした}、駿^{する}河^が臺^{だい}への路^{みち}なれば茂^{しげ}れる森^{もり}の木^このし
 た暗^{やみ}侘^{わび}しけれど、今宵^{こよひ}は月^{つき}もさやかかなり、廣^{ひろ}小^{こう}路^ろへ出^いづれば晝^{ひる}
 も同^{どう}様^{やう}、雇^{やと}ひつけの車^{くるま}宿^{まやど}とて無^なき家^{いへ}なれば路^{みち}ゆく車^{くるま}を窓^{まど}か

ら呼よんで、合がてん點が行いつたら兎とも角かくも歸かへれ、主人あるじの留守るすに斷ことわりなしの
 外ぐわい出いしゆつ、これとがを咎とがめられるとも申まをしわけ譯ことばの詞あは有あるまじ、少すこし
 時刻じこくは遅おくれたれど車くるまならば遂つひ一と飛とび、話はなしは重かさねて聞ききに行ゆか
 う、先まづ今夜こんやは歸かへつて呉くれとて手てを取とつて引ひき出いすやうなるも事こと
 あら立だてじの親おやの慈じ悲ひ、阿お關せきはこれまでの身みと覺かく悟ごしてお父とつさん様、
 お母つかさん様、今夜こんやの事ことはこれ限かぎり、歸かへりまするからは私わたしは原はら田だの妻つまな
 り、良おつと人を誹そしるは濟すみませぬほどに最もう何なにも言いひませぬ、關せきは立り
 派つぱな良おつと人もを持つたので弟おとの爲ためにも好いい片かたうで腕、あゝ安あん心しんなど喜よろこ
 んで居ゐて下くだされば私わたしは何なも思おもふ事ことは御座ござんせぬ、決けつして決けつして不ふ
 りやうけん
 了だ簡けんなど出だすやうな事ことはしませぬほどに夫それも案あんじて下くださりま
 すな、私わたしの身からだ體たいは今夜こんやをはじめに勇いさむのものだと思おもひまして、彼あの

ひとおも
 人の思うまゝに何となりして貰ひましよ、夫では最う私は戻りま
 す、亥之さんが歸つたらば宜しくいふて置いて下され、お父様
 もお母様も御機嫌よう、此次には笑ふて参りまするとて是非な
 さうに立あがれば、母親は無けなしの中着さげて出て出で駿
 河臺まで何程でゆくと門なる車夫に聲をかくるを、あ、お母
 様それは私がやりまする、有がたう御座んしたと温順しく挨拶
 して、格子戸くゞれば顔に袖、涙をかくして乗り移る哀れさ、
 家には父が咳拂ひの是れもうるめる聲成し。

下

さやけき月つきに風かぜのおと添そひて、虫むしの音ねたえ／＼に物ものがなしき上う
 への野のへ入いりてよりまだ一町てうもやう／＼と思おもふに、いかにしたるか車し
 やふ夫ははびつたりと轆かぢを止とめて、誠まことに申まをかねましたしが私わたしはこれで御免ごめん
 を願ねがひます、代だいは入いりませぬからお下おりなすつてと突だし然ぬけにいは
 れて、思おもひもかけぬ事ことなれば阿關おせきは胸むねをどつきりとさせて、あれ
 お前まへそんな事ことを言いつては困こまるではないか、少すこし急いそぎの事ことでもあり
 増ましは上あげやうほどに骨ほねを折をつてお呉くれ、こんな淋さびしい處ところでは代かは
 りくるの車まも有あるまいではないか、それはお前まへ人ひと困こまらせといふ物もの、
 愚ぐ圖づらずに行いつてお呉くれと少すこしふるへて頼たのむやうに言いへば、増まし
 が欲ほしいと言いふのでは有ありませぬ、私わたしからお願ねがひです何どうぞお下おり
 なすつて、最もう引ひくのが厭いやに成なつたので御座ござりますと言いふに、

それではお前まへ加かげん※でも悪わるるいか、まあ何どうしたと言いふ譯わけ、此處こゝまで
 挽ひいて來きて厭いややに成なつたでは濟すむまいがねと聲こゑに力ちからを入れて車夫しやふ
 を叱しかれば、御免ごめんなさいまし、もう何どうでも厭いややに成なつたのですか
 らとて提ちようちん燈もちを持もちしまゝ不圖ふと脇わきへのがれて、お前まへは我わがまゝの車く
るま夫まさんだね、夫それならば約きめ定の處ところまでとは言いひませぬ、代かはりのあ
 る處ところまで行いつて呉くれゝば夫それでよし、代だいはやるほどに何處どこか處そこら
 まで、切せめて廣ひろ小路こうぢまでは行いつてお呉くれと優やさしい聲こゑにすかす様やう
 にいへば、成なるほど若わかいお方かたではあり此この淋さびしい處ところへおろされては
 定さだめしお困こまりなさりませう、これは私わたしが悪わるう御座ござりました、では
 お乗のせ申まをませう、お供ともを致いたませう、嗚さぞお驚おどろきなさいましたらう
 とて悪わる者ものらしくもなく提ちようちん燈もちを持もちかゆるに、お關せきもはじめむねて胸

をなで、心丈夫に車夫の顔を見れば二十五六の色黒く、小男の瘦せぎす、あ、月に背けたあの顔が誰れやらで有つた、誰れやらに似て居ると人の名も咽元まで轉がりながら、もしやお前さんはと我知らず聲をかけるに、ゑ、と驚いて振あふぐ男、あれお前さんは彼のお方では無いか、私をよもお忘れはなさるまいと車より凜るやうに下りてつく／＼と打まもれば、貴嬢は齋藤の阿關さん、面目も無い此様な姿で、背後に目が無ければ何の氣もつかずに居ました、夫れでも音聲にも心づくべき筈なるに、私は餘程の鈍に成りましたと下を向いて身を恥れば、阿關は頭の先より爪先まで眺めていゑく私だとして往來で行逢ふた位ではよもや貴君と氣は付きますまい、唯た今の先までも知ら

ぬ他人たにんの車夫くるまやさんとのみ思おもふて居ゐましたに御存ごぞんじないは當あたり然まへ、
 もつたい體たいない事ことであつたれど知しらぬ事ことなればゆるして下くだされ、まあ
 何時いつから此こん様な業ことして、よく其そのか弱よほい身みに障さわりもしませぬか、伯お
 母ぼさんが田舎いなかへ引取ひきとられてお出いでなされて、小川町をがはまちのお店みせをお廢や
 めなされたといふ噂うわさは他處よそながら聞きいても居ゐましたれど、私わたしも昔むか
 しの身みでなければ種いろく々と障さわる事ことがあつてな、お尋たづね申まをすは更さらな
 ること手紙てがみあげる事ことも成なりませんかつた、今いまは何處どこに家うちを持つて、
 お内儀かみさんも御健勝おまめか、小兒ちっさいのも出で來きてか、今いまも私わたしは折をりふし小
 がはまち川町くわんこうばの勸工場み見物ゆきに行ゆまする度たび々く、舊もとのお店みせがそつくり其そ
 儘のま同じ烟草店たばこみせの能登のやといふに成なつて居ゐまするを、何時いつ通とほつ
 ても覗のぞかれて、あゝ高坂かうさかの録ろくさんが子供こどもであつたころ、學がく校かう

の行返りに寄つては巻烟草のこぼれを貰ふて、生意氣らしう
 吸立てた物なれど、今は何處に何をして、氣の優しい方なれば此
 様な六づかしい世に何のやうの世渡りをしてお出ならうか、夫れ
 も心にかゝりまして、實家へ行く度に御様子をも、もし知つても居
 るかと聞いては見まするけれど、猿樂町を離れたのは今で五年
 の前、根つからお便りを聞く縁がなく、何んなにお懐しう御座ん
 したらうと我身のほどをも忘れて問ひかくれば、男は流れる汗を
 手拭にぬぐふて、お恥かしい身に落まして今は家と言ふ物も御
 座りませぬ、寐處は淺草町の安宿、村田といふが二階に轉
 がつて、氣に向ひた時は今夜のやうに遅くまで挽く事もあります
 るし、厭やと思へば日がな一日ごろくとして烟のやうに暮し

て居ゐまする、貴嬢あなたは相變あいはらずうつつの美うつくくしき、奥様おくさまにお成なりななさ
 れたなと聞きいた時ときから夫それでも一度どは拜おがむ事ことができ出で來きるか、一し生しょうの内うちに
また又またお言葉ことばを交かはす事ことができ出で來きるかゆめと夢ゆめのやうねがに願ねがふて居ゐました、今け
 日ふまでは入いり用ようの命いのちと捨すて物ものに取とりあつつかふて居ゐましたけれど
いのち命いのちがあればごたいめんこそごたいめんの御對面ごたいめん、あゝ宜よく私わたくしをかう高かう坂さかの録ろく之の助すけと覺おぼ
 えて居ゐて下くださりましたかたじけ、辱かたじけなう御座ござりますと下したを向むくに、阿關おせきは
 さめ／＼として誰だれも憂うき世よに一人ひとりと思おもふて下くださるな。
 してお内儀かみさんおせきはと阿關おせきの問とへば、御存ごぞんじで御座ござりましよ筋すぢ向むか
すぎたふの杉田すぎたやが娘むすめ、色いろが白しろいとかつかう恰かつかう好かうが何どうだいとか言いふて世間せけんの
ひと人ひとは暗やみ雲くもに褒ほめたものたてた女ござで御座ござります、私わたしが如いか何かにも放蕩のらをつ
 くして家うちへとは寄よりつかぬやうなに成なつたを、貫もらふべき頃ころに貫もらふ

ものもら
 物を貰はぬからだと親類しんるいの中の解わからずやが勘違かんちがひして、彼れ
 ならばと母親は、おやが眼鏡めがねにかけ、是非ぜひもらへ、やれ貰へと無茶苦茶
 に進すすめたてる五月蠅うるささ、何うなりと成なれ、成なれ、勝手かってに成なれとて
 彼れを家へ迎むかへたは丁度貴嬢てうどあなたが御懷妊ごくわいにんだと聞きました時分じぶんの事、
 一年目ねんめには私わたしが處ところにもお目出めでたうを他人ひとからは言いはれて、犬張いぬはり
 子や風車かざぐるまを並ならべたてる様やうに成なりましたれど、何なんのそんな事こと
 で私わたしが放蕩のらのやむ事ことか、人ひとは顔かほの好いい女房にようぼを持もたせたら足あしが止と
 まるか、子こが生うまたら氣きが改あらたまるかとも思おもふて居ゐたのであらうな
 れど、たとへ小町こまちと西施せいしと手てを引ひいて來きて、衣通姫そとほりひめが舞まひを舞ま
 つて見みせて呉くれても私わたしの放蕩のらは直なほらぬ事ことに極きめて置おいたを、何なんで
 乳ちくさい子供こどもの顔かほ見みて發心ほつしんが出來できませう、遊あそんで遊あそんで遊あそび抜ぬ

いて、呑んで呑んで呑み盡して、家も稼業もそつち除けに箸一本
 もたぬやうに成つたは一昨々年、お袋は田舎へ嫁入つた姉の處に
 引取つて貰ひまするし、女房は子をつけて實家へ戻したまゝ音
 信不通、女の子ではあり惜しいとも何とも思ひはしませぬけれ
 ど、其子も昨年そのこ さくねんの暮くれチプスに懸つて死しんださうに聞きました、女
 はませな物ものではあり、死しぬ際ぎはには定さだめし父とゝ様さんとか何なんとか言いふたの
 で御座ござりましよう、今年ことし居ゐれば五つになるので御座ござりました、何なん
 のつまらぬ身みの上うへ、お話はなしにも成なりませぬ。
 男をとこはうす淋さびしき顔かほに笑ゑみを浮うかべて貴あなた嬢ぢやうといふ事ことも知しりませぬので、
 飛とんだ我わがまゝの不ぶ調てう法はふ、さ、お乗のりりなされ、お供ともをしまする、
 嘸さぞ不ふ意いでお驚おどろきなさりましたらう、車くるまを挽ひくと言いふも名なばかり、

なに^なに^たの^の何^なが^か樂^らし^まに^に轆^{かぢ}棒^{ぼう}を^をに^ぎつ^て、何^なが^の望^ぞみに^に牛^う馬^{しう}の^ま眞^ま似^ねを^をす^る、
 錢^ぜを^を貫^もら^へたら^ら嬉^{うれ}しい^か、酒^{さけ}が^の呑^のまれた^ら愉^ゆ快^{くわい}な^か、考^{かん}へ^ば何^なに^に
 も^も彼^かも^も悉^{しつ}皆^{かい}厭^いや^で、お^お客^{きやく}様^{さま}を^を乗^のせ^{やう}が^が空^{から}車^らの^{とき}時^{とき}だら^うが
 嫌^いや^とな^ると^と用^{よう}捨^{しや}な^く嫌^いや^に成^なり^{ます}る、呆^あれ^はて^る我^わま^を男^{をとこ}、
 愛^{あい}想^{そう}が^が盡^つき^るで^は有^あり^{ませ}ぬ^か、さ、お^の乗^のり^なさ^れ、お^お供^{とも}を^をし^ま
 す^と進^{すす}め^られ^て、あ^あれ^し知^しら^ぬ中^{うち}は^は仕^{しか}方^たも^もな^し、知^しつ^て其^{それ}車^らに^に乗^のれ
 ます^も物^{もの}か、夫^それ^でも^も此^こん^さび^な淋^びしい^と處^{ところ}を^を一^{ひとり}人^{ひと}ゆ^くは^は心^{こゝろ}細^ほい^ほど
 に、廣^{ひろ}小^{こう}路^ぢへ^で出^でる^まで^で唯^{たゞ}道^{みち}づ^れに^に成^なつ^て下^{くだ}さ^れ、話^はな^がら^ら行^ゆき
 ませ^せう^とて^てお^お關^{せき}は^は小^こ棲^{すま}少^{すこ}し^し引^ひあ^げて、ぬ^ぬり^り下^げ駄^たの^のお^おと^と是^これ^も淋^さび
 げ^げなり。

昔^{むかし}の^{とも}友^{とも}とい^いふ^う中^{ちゆう}に^もこ^これ^は忘^わす^れら^れぬ^ゆ緣^{かり}の^{ある}人^{ひと}、小^を川^が町^{まち}の^高か

うさか 坂とて小奇麗な烟草屋の一人息子、今は此様に色も黒く見ら
 れぬ男になつては居れども、世にある頃の唐棧ぞろひに小氣の
 利いた前だれがけ、お世辭も上手、愛敬もありて、年の行か
 ぬやうにも無い、父親の居た時よりは却つて店が賑やかなと評
 判された利口らしい人の、さてもくの替り様、我身が嫁入り
 の噂聞え初た頃から、やけ遊びの底ぬけ騒ぎ、高坂の息子は丸
 で人間が變つたやうな、魔でもさしたか、崇りでもあるか、よ
 もや只事では無いと其頃に聞きしが、今宵見れば如何にも淺
 ましい身の有様、木賃泊りに居なさんすやうに成らうとは思
 ひも寄らぬ、私は此人に思はれて、十二の年より十七まで明暮
 れ顔を合せる毎に行々は彼の店の彼處へ座つて、新聞見なが

あきな
 ら商ひするのと思ふても居たれど、量らぬ人に縁の定まりて、親
 やく
 々の言ふ事なれば何の異存を入れられやう、烟草の録さんにはと
 おも
 思へど夫れはほんの子供ごゝろ、先方からも口へ出して言ふた事
 はなし、此方は猶さら、これは取とまらぬ夢の様な戀なるを、思
 ひ切つて仕舞へ、思ひ切つて仕舞へ、あきらめて仕舞うと心を定
 めて、今の原田へ嫁入りの事には成つたれど、其際までも涙が
 こぼれて忘れかねた人、私が思ふほどは此人も思ふて、夫れ故
 の身の破滅かも知れぬ物を、我が此様な丸鬚などに、取濟
 したる様な姿をいかばかり面にくゝ思はれるであらう、夢ささらさ
 うした樂しらしい身ではなけれどもと阿關は振かへつて録之助
 を見やるに、何を思ふか茫然とせし顔つき、時たま逢ひし阿關

むかに向つて左のみは嬉しき様子も見えざりき。

ひろ小路を出れば車もあり、阿蘭は紙入れより紙幣いくらか取り

出して小菊の紙にしほらしく包みて、録さんこれは誠に失禮

なれど鼻紙なりとも買つて下され、久し振でお目にかゝつて何

か申たい事は澤山あるやうなれど口へ出ませぬは察して下され、

では私は御別れに致します、随分からだを厭ふて煩らはぬ様に、

伯母さんをも早く安心させておあげなさりまし、蔭ながら私も

祈ります、何うぞ以前の録さんにお成りなされて、お立派にお店

をお開きに成ります處を見させて下され、左様ならばと挨拶すれ

ば録之助は紙づゝみを頂いて、お辭儀申す筈なれど貴嬢のお手

より下されたのなれば、あり難く頂戴して思ひ出にしまする、

お別れ申すが惜しいと言つても是れが夢ならば仕方のない事、さ、
 お出なされ、私も歸ります、更けては路が淋しう御座りますぞと
 からぐる春
 て空車引いてうしろ向く、其人は東へ、此人は南へ、大路の柳月
 のかげに靡いて力なささうの塗り下駄のおと、村田の二階も原田
 の奥も憂きはお互ひの世におもふ事多し。

終

青空文庫情報

底本：「文藝俱樂部 閨秀小説號」博文館

1895（明治28）年12月10日

初出：「文藝俱樂部 閨秀小説號」博文館

1895（明治28）年12月10日

※初出時の署名は、「一葉女史」です。

※変体仮名は、通常の仮名で入力しました。

※「決」と「決」の混在は、底本通りです。

入力：万波通彦

校正：Juki

2015年9月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

十三夜

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>